

## 環境大臣賞（優秀賞）

室根の里から海をおも　岩手県　岩手県立一関第一高等学校附属中学校　三年　菅原　菜央

ある雨の日。

灰色の空気に沈んだ室根の山に、無数の雨粒たちが降り注いでいます。その中の一滴が、こうつぶやきました。

「もうすぐ僕らは地面に落ちて弾けてしまう。なんてはかない運命なんだろう。」

「いやや雨くん、そんなことはないよ！」

答えたのは、大きな葉っぱを揺らす、まだ若い木でした。

「なぜ？じゃあ僕たちは、どうなるの？」

小さな雨粒は、若い木の葉っぱの上にとびん、と着地すると木に尋ねました。

「降った雨粒が室根山の森の土に浸みると、雨水に土の栄養分が溶け出すんだ。その水が、大川の流れに乗って、気仙沼の街を走り、やがて気仙沼にたどり着く。森の力が海を豊かにするんだよ。そう、雨くんたちが森と海をつないでいるのさ！」

そんな自然の音が聞こえてくるような美しい町、室根町。私が住むこの町では、毎年夏に「森は海の恋人」植樹祭を行っています。この植樹祭の始まりは、宮城県気仙沼市の養殖カキ漁師さんたちによるものでした。森と海には、どのようなつながりがあるのでしょうか。

今から三十五年ほど前、気仙沼湾では、ある深刻な問題が発生していました。養殖のカキがすべて毒々しい赤色に染まってしまったのです。原因は、プランクトンの異常発生による赤潮。カキは生きるために大量の海水を吸うため、赤潮の影響を直に被りました。血ガキと呼ばれた真紅のカキは、廃棄処分するほかなかったのです。

その当時、気仙沼湾に注ぐ大川沿いでは、工場の排水により、水質があまり良いものではありませんでした。また、降雨のたびに山の土が川

に流入したことも影響しました。川の源流である室根山の森林は、長く人の手が入らず荒れていたためです。

このような森の異変が、海の異変をも招いていたことに気づいたカキ漁師たちは、大川中流域の住民と力を合わせ、森への植樹を始めました。植えるのは、主に秋に葉を落とし、良質な腐葉土をつくる広葉樹です。しかし、真つぐな針葉樹と違い、曲がった部分の多い広葉樹は材木としては使えません。植樹の話が持ち上がったころは、住民の反対の声も大きかったようです。しかし、漁師たちが海と森との密接な関係を丁寧に説き、植樹への協力を感謝することを忘れずに根気よく活動を続けた結果、年々事業を拡大し現在のような植樹祭になったのだそうです。

私たちが植えた木々の向こうに、清らかな海があり、その海の命は私たちの生活に密接に結びついています。そのことを心にとめて行動することが大切だと私は思っています。だから、私は日常の中で、例えば次のようなことを心がけています。食事は食べきれぬ分だけ自分でよそい、食べ終わったら汁や油分を要らない紙で拭いてから洗います。学校で美術のパレットを洗う時も同様で、この時使うのは筆洗に残った水です。書道教室でも書き損じた紙で硯や筆を拭いてから洗っています。こうすれば、拭いた分だけ汚れを川に流さずに済むからです。

森の命は、海の命とつながっています。そして、海の命は私たちに恵みをもたらしてくれます。森と海を守るために、私たちができること。それは、まずは知ることです。命のつながりを、私たちに与えられている恩恵を知り、自然を守るために行動を起こしていくことが大事なのではないでしょうか。

食卓の向こうにある海を、絵筆の向こうにある海を、そして、森の向こうにある海を、忘れてはいけません。私たちは自然に生かされているのだから。